
フィーリング・サウンド！

弥七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィーリング・サウンド！

【Nコード】

N3277S

【作者名】

弥七

【あらすじ】

幼馴染で、ロックバンドを組んでいる悠紀子。彼女にバンドに誘われるが、僕は一蹴し、文芸部に向かう。文芸部では遥先輩が優しく声をかける。そんな中で揺れ動く僕は……

「最強のバンドを作る！」

そう彼女は僕に宣言した。

夕陽が差し込む、放課後の教室。僕は部活に向かおうと荷物をまとめていると、息を切らした彼女は教室に飛び込んできて、いきなり唾を飛ばしながら、叫んだ。

制服のブレザーの上にパーカーを羽織って、短い髪にドクロの髪飾りをつけて、背中にギターケースを背負った彼女、久遠悠紀子くおんゆうきこは僕の幼馴染だ。猫みたいに、目じりをきゅっと上げて、僕を真っ直ぐ見据える。昔から、男子のような性格の彼女とは、高校まで一緒に机を並べてきたが、悪友のように接している。

そんな彼女は僕にバンドの誘いを持ちかけてきたのだ。

「いきなりなんなのさ、バンドならもう組んでるじゃないか」

僕らの高校には軽音楽部は無いので、悠紀子は外部でクラスメイトとバンドを組んでいる。もちろん、そこに僕は含まれない。

「ちがうの、ちがうの。全然違うの！」

……違うの三段活用。用法はすべて同じ。

「最強のバンドを作るの！ ツェッペリンよりも、ローリングストーンズよりもすごいバンドを作るのよ！」

「ごめん、それは無理だと思うよ」

洋楽のアーティストは詳しくないけれど、そのバンドを超えることは、高校生の身では絶対に無理だと思う。技術的にプロに到底及ばないんだから。

「僕は力になれそうも無いよ。じゃあ、部活行くから」

そういう残して、僕は教室を後にした。ちなみに、僕の部活は文芸部。

教室では、悠紀子が僕の後姿に、何かを言いたげにしていた。

文芸部の部室で、本を読みながら、僕は考えた。

悠紀子と僕は、小さい頃から仲良しで、当時はずっと一緒に遊んでいた。そのせいで、趣味が著しく被っている。しかし、中学に上がるころに、彼女はバンドを組み始めた。そして、僕は中学の頃から、文芸部に入った。

（どうして……今更、新しくバンドを組みたいなんて言い出したんだ？）

既に彼女はバンド、『ショック・ステイール』というパンクバンドを組んでいる。ライブハウスでも演奏したりしているらしい。そこそこは人気があるはずだ。そう聞いている。

それに、音楽関係の話を僕にしても分からない。僕に分かるのは、太宰治の人生を読み解くことだろう。

「どうしたの？ 松本君。悩み事？」

文芸部の先輩、るしろはるか流城遥さんは、パイプイスに座った僕の顔を覗き込んでいた。柔らかな表情の彼女は、自然に顔を近づけて、僕の心を読み解こうとする。長い黒髪がさらさらと流れ、その甘いおいが僕の鼻腔をくすぐる。

「なんでもありませんよ、それより、新人賞に応募するって意気込んでた新作はできたんですか？」

「ふふっ、まだもう少し待ってね。もうちょっとで完成するから。そしたら一番に読ませてあげるっ」

文芸部には、それなりの部員がいるが、僕にとっては遥さん以外は目に映らない、そんな不思議な錯覚がした。

「それにしても、松本君は書かないの？ 読んではっかりじゃない」

「僕には、小説家になれるようなエキゾチックな人生経験はないんです。どうしたって、過去の文豪に劣りますよ」

「そりゃあ、名作を生み出す作家にすぐなれるわけじゃあないけれど。でも読んでたら書きたくならない?」

「僕はそうでもないですよ」

そういうと、遙さんは机に戻って、小説の続きを書き始めた。いまどき、手書きで執筆する人なんていないと思うが、彼女は天才的な機械オンチである。

カリカリと、規則正しい、子気味良い音を聞きながら、僕はペーシをめくった。

その日の、帰り。僕は校門の前で、悠紀子を見つけた。校門に背中を預け、下を俯き、まるで捨てられた子猫のような彼女に、少し面食らった。普段はこんな顔しない。絶対しない。いや、僕には見せない。

「どうした?」

短く聞いても、少し顔を上げ、なんでもない、僕についてきた。どうやら帰るらしい。

「それで、その……バンドの話はどうなった?」

なんだか気まずくて、普段は悠紀子と一緒にいて黙ることなんて無くて、もし黙ってもそれが居心地悪く感じることもなんか無いけど、今の僕は間を持たせようとするかのように、雑談を始める。話題が見当たらないので、咄嗟にバンドの話が出てしまった。僕が蒸し返す必要も無いのに。

「全然」

そして黙る。

それが気まずくて。

なんだか後ろめたい。

「秀のせいだから」

「僕のせい?」

聞き返しても、それぎり話をしてくれない。諦めて、黙々と歩い

ていると、悠紀子が僕の袖を引っ張った。頭一つ低い彼女の身長では、僕は兄妹に見えるかもしれない。

「ねえ、秀。文芸部楽しい？」

「えっ、うん。まあ」

もう文芸部も中学を含めれば五年目だ。今更楽しいとかそういう感じではないけれど。

「じゃあ、あの先輩のこと……好きなの？」

「えっ……!?!」

僕は、悠紀子につままれた袖口から、電流が流れるような衝撃が走った。

僕が、遙さんを？

悠紀子は……。

「わ、わからないよ……」

「そう、そうなんだ、そうなんだね。」

三回も。確認するように。望むように。縋るように。僕に求める。

もうあたりは暗い。夕陽が沈みかけている。そんな中、僕と悠紀子はつながったまま、歩く。幼馴染の二人。見えない何かでずっとつながっているような気がしてた。でも、僕は今、この手を振りほどいたら、永久に悠紀子との絆が切れてしまうような錯覚に陥った。通いなれた通学路が、つり橋のように思えた、その上を、僕ら二人は身を寄せてわたっているんだ。

家に帰り、部屋に入る。まず目に付くのは、ギブソンのレスポール。

れっきとした、エレキギターだ。

しかも、ヴィンテージといって、かなり高価なものだ。

もちろん、僕のものだ。

アンプもある。

エフェクターもある、コンパクトエフェクターを五個も六個も買い集めて、音作りに何時間もかけた。

パソコンには、オーディオインターフェイスがあつて、ギターの音を録音したり編集したり出来る。

部屋を片付ける時には、ピックが十枚も出てきた。

つまり、僕はギターを弾いている。それも、ガチで。

悠紀子は知らないはずだ。言っていないから。

始めたきっかけは、中学の時、悠紀子が始めたからだ。でも、僕も始めたことを悠紀子に言わなかったのは、当時の僕はヘタクソだったからだ。彼女は既に、バンドを組んでいて、そこにに入れてもらうには、僕の技量が足りないように思えた。というより、恥ずかしかった。彼女が演奏しているのを聴いて、見て、そして、彼女が既に僕の遥か先を行っていることを思い知らされた。彼女の隣には、僕がいるべきじゃない。そんな気がしたんだ。

翌日、僕は文芸部室にいた。いつものように、遥さんの隣で、本を読む。それは永久に続く楽園のような心地よさがある。

ふいに、遥さんが顔を寄せて、話しかけてきた。その仕草に、胸の奥が少し踊った。

「ねえねえ、松本君と、久遠ちゃんって付き合ってるの？」

「ええっ!？ いや、ただの幼馴染ですけど」

「えー、でも、昨日久遠ちゃん校門の前で待ってたじゃない。その後一緒に帰ってさ。いいなー私も松本君みたいな彼氏欲しいなーって思ってたんだよ?」

「もう、からかわないでくださいよ」

そう、軽く言い返したが、僕の胸の中は、楽園から、冷たい地面に叩きつけられたような心境だった。昨日の悠紀子の言葉が蘇る。

『……好きなの?』

僕はどうしたら良いんだろう。素直になろうとしても、分からないというのが素直な感情だ。そもそも、自分本位に捕らえすぎだ。彼女たちの心境を掴み取れない以上、軽率な判断を下すべきではない。……いや、他人の心境なんて、掴み取れることは無いのか。小説のように、モノローグが書かれているわけではない。他人が他人である以上、僕は外側から出しか、僕の知る彼女達しか捉えることが出来ない。

「小説は書きたくない?」

ふっ、っと、風が吹き抜けた。

「僕は……ギターが弾きたいです」

はっきりと、僕はそう答えた。それが、僕の答だ。

体育館では、既に楽器のスタンバイが済んでいた。ドラムセットには、悠紀子のバンドのドラマーが。ベースも同じバンドの人だ。ギターを構える悠紀子。そして、僕は、愛用のギブソンを手に、その中に加わる。

「何かやりたい曲はある?」

悠紀子は高揚した顔で、僕に尋ねる。

「そうだなあ。エリッククラプトンのLaylaかな」

「正式にはデレク・アンド・ザ・ドミノス名義だけどね。いいよ。やろう」

そうして、僕達の、僕達だけのライブが始った。

Layla。邦題いとしのレイラは激しいギターの前半と、後半の美しいピアノイントロが合わさった名曲だが、今回はピアノが無

いので、ギターアレンジとなった。ボーカルは、僕と悠紀子のツイン。息の合わせり方が、他の人とは違うだろう。僕らの絆を音楽に乗せ、確かめ合う。

演奏している時、僕は確かに僕を感じた。自分にしか出来ないこと。もしも、今。僕が演奏をやめれば、この一体感は消える。でも、それは逆説的に、自分が確実にここに必要とされていいと感じれる。その感覚が……楽しい！

僕らはそのまま、何曲も続けた。smells like ten spirit, Stairway to Heaven, I was born to love you, I Don't Want to Miss a Thing 様々な曲をやって、いつの間にか体育館は観客で溢れていた。

「じゃあ最後の一曲です！」

悠紀子がマイクを握り、観客に告げる。

「何をやるの？」

僕の問いに、悠紀子は満面の笑みで答える。

……………。

ライブの後、駆けつけた先生になし崩しにお開きにされ、僕らはいそいそと片付けた。

それをこっそり抜け出し、体育館の外に出た。心地よい風が、僕らを包む。

「なんで、僕がギター弾けるって知ってたのさ」

「聞こえたから。秀のサウンドが！」

（後書き）

荒削りな一発短編です。無性に短編が書きたくなって書いていました。

基本的には、知ったかぶりの音楽の話題なので、話半分に聞き流してください。

ライブのラストの曲は、好きな曲を想像してもらえればと思います。こんな作品ですが、もしも読んでくれた人はありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3277s/>

フィーリング・サウンド！

2011年4月9日12時13分発行